令　和　7　年　度

事　業　報　告　書

公益財団法人かずさＤＮＡ研究所

令 和 7 年 度 事 業 報 告 書

（令和７年４月１日～令和８年３月３１日）

Ⅰ　基本方針

令和７年度は、５年間の第６期中期経営計画の３年目として、「先端的な研究成果・技術を活用した社会実装の推進」、「先端的な研究開発の推進」、「広報・理科教育支援の推進」、「自立型経営の強化」を基本的方針とし、事業を推進した。

「先端的な研究成果・技術を活用した社会実装の推進」として、開所当初から実施してきたヒト遺伝子研究の延長上に位置づけられる難病の遺伝学的検査は、平成２９年７月に衛生検査所の登録を受け、千葉大学医学部附属病院、千葉県こども病院など県内だけでなく、全国の 900 を超える医療機関等から難病の遺伝学的検査を受け入れてきた。その結果、わが国の難病領域の遺伝学的検査に不可欠の施設となった。また、植物ゲノム研究の成果や関連技術の実用例であるＤＮＡマーカーを利用した各種農作物の種子純度検査については、国内主要種苗検査会社からさまざまな作物種子の大規模検査を受託し、農業生産現場への高品質な種子の安定供給に貢献した。

また、生体内物質の高精度計測技術による生体や食品等の成分分析、種苗会社向けの農作物の先端的ゲノム育種技術の導入、ヒト由来遺伝子資源の有償提供、ＤＮＡ解析関連機器や電子計算機システムを活用したゲノム・遺伝子構造解析など、ゲノム解析技術の幅広い産業分野での社会実装に向けた研究開発支援を行った。さらに、網羅的なタンパク質解析による診断・創薬への取組も強化した。

「先端的な研究開発の推進」としては、基礎的研究のうち社会的重要性が高まることが期待されるゲノム関連研究領域や新規技術開発、先端的かつ挑戦的なプロジェクトを柔軟に取り入れ、多様性に富む研究シーズの育成に努めた。また、研究所で収集される大規模データを最新の情報技術で分析し、生物学と情報学を統合した新たな技術開 発や解析を目指す AI ゲノム情報学研究室を新設した。

「広報・理科教育支援の推進」としては、理科教育支援の需要増加を踏まえ、県教育委員会と連携を強化しながら、次世代を担う子供達が最先端の科学教育に触れ、理科に対する関心・理解が高まる取組を展開した。また、オンライン配信等のデジタル技術も積極的に活用し、県内外に活動の場を広げた。

「自立型経営の強化」としては、ＤＮＡ研究所が蓄積してきた膨大な遺伝子資源やその開発過程で得られた高度なＤＮＡ解析技術及び成分分析等を民間企業等に提供し、その対価を得ることで、自立型経営の強化に向けた財源の確保に努めた。

Ⅱ　実施計画

1　先端的な研究成果・技術を活用した社会実装の推進

（1）医療への貢献

①ヒト疾患遺伝子検査

難病の遺伝学的検査は、医療現場と患者からの強い要望があるにも関わらず、採算性の低さから必要とされる検査が既存の検査会社からは社会に提供されてこなかった。加えて、改正医療法の施行によって大学等の臨床研究が診断目的としては利用できないという閉塞状態が続いていたが、本研究所では 2017 年から試験的に登録衛生検査所を立ち上げ、更なる要望に応じるため継続的改善を行い、現在では、わが国のＤＮＡシーケンシングによる難病の遺伝学的検査を実施する施設として広く認知されるに至った。今年度もこの活動を維持・継続することで、かずさＤＮＡ研究所に蓄積されたヒト遺伝子研究の成果を社会還元した。加えて、令和 2 年度、令和 4 年度及び令和 6 年度の保険収載の改訂に伴う疾患の増加にも対応し、千葉県内外の医療機関とのネットワークを強化することで臨床的遺伝学的検査の提供規模を更に拡大し、より多くの臨床診断に貢献した。

②千葉県がんセンター等との連携強化

千葉県がんセンター、千葉県こども病院、千葉大学医学部附属病院、ちば県民保健予防財団など県内の医療機関との連携を深め、各々の専門性を生かした分業体制のもと、協働して千葉県におけるゲノム医療の実現に向けた活動を展開した。

③ウイルス感染症の診断及び治療法開発

ＤＮＡ研究所がこれまでに蓄積した遺伝子解析や、タンパク質解析に関する高度な技術や知見を活かし、感染症の重症化予測のためのマーカー探索などの取組を臨床研究として継続した。

（2）農業への貢献

①育種プロセスの加速に向けた最先端ＤＮＡ解析技術の導入支援

民間種苗会社や地域の公的研究機関に対して、開所以来蓄積してきたＤＮＡマーカー関連解析技術や情報を活用したサービスを提供することによって、国内種苗産業の国際的競争力の強化と農業の活性化に貢献した。

②農業用の高品質種子の安定供給と品種保護に向けた検査・鑑定サービスの提供

ＤＮＡマーカー関連技術等を活用して、最適な検査技術・サービスを提供することで、高品質種子の安定供給の実現を図るとともに、品種の育成者権の保護にも貢献した。

③千葉県農林総合研究センターとの連携

様々な育種素材や育種・栽培技術を有する千葉県農林総合研究センターに対し、ＤＮＡ研究所が先端的なＤＮＡ解析技術を提供する全国でもユニークな連携を継続し、画期的な新品種の育成を目指すとともに、環境に配慮した農業の普及にも貢献した。

（３）環境問題への貢献

①ＤＮＡ解析による生物多様性のモニタリング

近年の技術開発によって、対象生物を捕獲することなく土壌、水、糞便から抽出したＤＮＡ分析をすることで、生息する生物種の特定が可能となった。これらの最新の検出技術を導入整備し、ＤＮＡによる各種環境評価事業を実施した。また、現在主流となっている魚類以外の生物種分布調査への応用可能性を検討するとともに、環境モニタリングの社会実装への基盤構築のための研究を推進した。

（４）産業界・アカデミア等との連携

①民間企業、大学、公的研究機関への技術支援

これまで培ってきたゲノム関連分析技術、遺伝子発現解析、蛋白質解析、代謝物解析を活用した技術支援を継続して行った。さらに、単一のサンプルを起点にして複数のオミックス解析を同時に行うマルチオミックス解析を活用した技術支援を積極的に周知して実施した。

②Greater Tokyo Bio communityによる活動の展開

令和４年度に内閣府より認定された Greater Tokyo Bio community（以下、「ＧＴＢ」という。）にＤＮＡ研究所を含む「千葉・かずさエリア」が東京圏のイノベーション拠点の１つとして認定された。これを受け、同推進拠点として認定された柏の葉エリアをはじめ、大学、研究機関、インキュベーション施設等と連携し、バイオコミュニティーの形成に向けた取組を推進した。

③バイオ関連産業の振興に向けた千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議の運営

バイオ関連分野の新たな産業や事業の創出を支援するため、千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議の事務局を県とともに担い、会員等のニーズに応じたセミナーや交流会を開催するとともに、産学官交流の場を提供することによって、共同研究等促進のためのシーズ発掘や情報発信に努めた。また、ＧＴＢ協議会をはじめとする他のネットワーク組織にも参画し、大学、インキュベーション施設、公設試験場、千葉県等との連携を進め、共同研究等のためのシーズ発掘やマッチングの促進を図った。

２　先端的な研究開発の推進

（１） 基礎・応用基盤研究及び技術開発の強化

基礎的研究のうち社会的重要性が高まることが期待されるゲノム関連研究領域や新規技術開発、先端的かつ挑戦的なプロジェクトを柔軟に取り入れ、多様性に富む研究シーズの育成に努めた。特に、網羅的なタンパク質解析を駆使した新規診断技術ツールの開発に取り組んだ。

（２）植物ゲノム基盤研究と産業支援・アウトリーチの推進

主要プロジェクトである植物ゲノムを俯瞰し、ゲノム構造を比較することで植物の分類体系を再構築する研究を行う「かずさゲノムプロジェクト」を推進した。

また、千葉県農林総合研究センターと強固に連携するなどして研究成果の社会実装を進めるとともに、研究成果を国内外に対して積極的にアピールし、研究室の活動内容について理解を得ることに努めた。

（３）疾病遺伝子研究

ゲノム医療実現のため、千葉大学未来医療教育研究機構、千葉県がんセンターなどとの連携研究を加速し、難治性疾患やがんの克服に向けた先端的な研究を推し進めた。

（４）AI 関連技術の導入による研究開発の高度化

近年、AI 関連技術は急速に発展し、研究開発の現場のみならず社会的な需要も急増しており、これに対応するため令和 7 年 10 月に「AI ゲノム情報学研究室」を新たに開設した。

３　広報・理科教育支援の推進

（１）情報発信の強化

研究開発の成果を学会や産業界に向けて広く発信するため、学会誌への研究論文の投稿や国内外の学会集会での発表、研究所主催のセミナー・ワークショップ等を実施した。

一般向けには、最新の研究開発の成果について、プレスリリースを積極的に行ったほか、ホームページや Facebook、X などの SNS を通じて活動情報をリアルタイムで公開した。更にＤＮＡ研究所の研究開発の成果や世界のＤＮＡ研究の動向、ＤＮＡ研究所で行う各種イベントなどを分かりやすく紹介するニュースレターを年４回発行するとともに、ＤＮＡ研究所のマスコットキャラクターなどを最大限に活用し、研究所のＰＲ活動を推進した。

○開所記念講演会

開 催 日　１０月２５日（土）１３：４５～１６：００

会　　場　かずさアカデミアホール メインホール

参加者数　４８８名（Web 配信による参加９８名、１１０名の見逃し配信を含む）

○一般の方を対象とした「科学イベント」（開所記念講演会以外の講演含む）

参加者数　４，２９１名

（２）理科教育支援の強化

将来を担う子供達が最先端の科学技術に触れ、理科に対する関心・理解が高まるよう、千葉県教育委員会と連携を強化しながら、小学生向けの体験教育から、理系高校生向けの高度な実践的教育まで幅広く展開した。また、対面での教育活動に加え、オンライン配信等のデジタル技術も積極的に取り入れることで効率化と多様化を図り、県内外に展開を進めた。

○　小学生から一般の方までを対象にした「ＤＮＡ出前講座」（通年）
　　参加者数　１，４９５名

○　中学校や高校を対象とした「ＤＮＡ実験宅配便」（通年）
　　参加者数　１，８９０名

○　千葉県内の中学生・高校生を対象としたかずさの森のＤＮＡ教室
　　開 催 日　３月２５日（水）１０：００～１５：００
　　会　　場　かずさＤＮＡ研究所
　　参加者数　２８名

（３）人材育成の強化

未来を担う子供達への教育支援と、我が国のゲノム科学や生命科学に関わる人材育成の２つの観点から、千葉県内の高校及び全国の SSH 指定校・経験校の高校生グループが自発的に決めた研究テーマに対する活動支援を実施した。また、当研究所で実施するＤＮＡキャンプに参加する高校生に対しても研究活動を支援した。

（４）ＤＮＡ Research

ＤＮＡ研究所の存在を国内外にアピールするとともに、ＤＮＡ及びゲノム研究に関する情報のハブとして国内外の関連コミュニティーに情報提供することを目的として学術雑誌ＤＮＡ Research を発行し、自然科学分野の専門誌として高い水準の維持に努めた。２０２４年のインパクトファクター（雑誌の引用頻度を示す指標）は２．９であり、「遺伝学と遺伝」に関連する国内自然科学専門誌の中でも高い水準を維持した。これによって、学術界における本研究所のプレゼンスと評価の向上に貢献した。

４　自立型経営の強化

（１）財源の確保

ア　バイオ産業技術支援センターの産業支援

ＤＮＡ研究所が蓄積してきた膨大な遺伝子資源及びその開発過程で得られた高度なＤＮＡ解析技術ならびに成分分析技術等を民間企業等に提供し、研究開発技術支援を実施した。本事業の推進にあたっては、ホームページや学会等への出展により産業技術支援活動の広報を行った。

また、企業や公的研究機関のニーズに応えるため、現場ニーズの把握に努め、最先端の幅広い分析技術を整備した。さらに、サービスメニューの見直しを行い、財源の確保に努めた。

イ　競争的外部資金の獲得

競争的外部資金とは、省庁等の資金配分機関が広く研究開発課題等を公募し、複数の専門家の評価に基づいて競争的に選抜したうえで研究者等に配分される研究資金である。

競争的外部資金の獲得は、ＤＮＡ研究所の研究ポテンシャルを高い水準で維持・向上させるとともに、財源の確保の点においても重要である。このため、千葉大学や千葉県がんセンターをはじめとする他の研究機関と連携し、引き続き競争的外部資金の申請・獲得に努めた。

科学研究費助成事業については、前年度からの継続も含めて、本年度以下の計３６件を実施した。

・学術変革領域研究(A)/横断的ゲノム比較から俯瞰する両性花多様性の変遷
・学術変革領域研究(A)/ Th17 細胞の自己認識における脂質代謝の作用と病原性応答への意義解明
・基盤研究(B)/リンパ球系譜の RORgt 多機能性を司る脂質経路の解明
・基盤研究(B)/細胞内発現タンパク質全貌解析のための真プロテオーム解析システムの開発
・基盤研究(C)/新規部位特異的組み換え酵素の認識サイトの同定とゲノムエンジニアリングツールの開発
・基盤研究(C)/乾燥ろ紙を用いた疾患原因蛋白質の網羅的自動抽出法の開発
・基盤研究(C)/ サトイモ科の祖先染色体構造の復元と染色体再編が種多様化に与えた影響
・挑戦的研究(萌芽)/脂肪滴 fate-mapping マウスを用いた病原性 T 前駆細胞の同定
・若手研究/CENP-B 酸性領域が作り出すクロマチン構造の解明と新型合成転写制御因子への応用
・若手研究/レアメタル吸着能を有する好酸性微細藻類の探索と生物機能の解明
・若手研究/サツマイモ由来新規ファイトアレキシン候補化合物群の生成メカニズムの解明
・若手研究/直接的なタンパク質複合体の全様解析システムの構築を目指して

・学術変革領域研究(A)/植物の挑戦的な繁殖適応戦略を駆使する両性花とその可塑性を支えるゲノム動態
・学術変革領域研究(B)/老化時計のリバイバル機構の解明に向けたマルチオミクス解析法の開発と応用
・基盤研究(A)/ムギ類種子休眠性の精密制御と分子育種法の確立
・基盤研究(A)/マイトファジーの生理的意義の解明と健康科学への応用
・基盤研究(B)/AI を用い成人末梢血シングルセルデータを参照した小児 SLE の免疫遺伝学的特性の解明
・基盤研究(B)/トウガラシの種間雑種において自己免疫過剰を引き起こす細胞質側トリガーの特定
・基盤研究(B)/都市植物における急速な高温適応の解明-1
・基盤研究(B)/都市植物における急速な高温適応の解明-2
・基盤研究(B)/ウンシュウミカン品種群成立におけるゲノム構造変異の解明
・基盤研究(B)/変異系統を用いたカラマツ雄花着花の原因遺伝子の特定とその発現制御機構の解明
・基盤研究(B)/認知症死後脳のハイブリットオミクス解析による認知症発症起源と疾患構造動態の解明
・基盤研究(B)/植物のバルク熱生産を支える発熱分子機構の分解およびローカルヒートの検出
・基盤研究(B)/乳汁脂質成分プロファイルが示す母乳育児の意義と次世代への影響
・基盤研究(C)/ネコブセンチュウゲノムの可能性とサツマイモ病原性レースとの関連
・基盤研究(C)/高深度プロテオーム解析による悪性黒色腫血中腫瘍マーカーの探索と臨床応用
・基盤研究(C)/家族集積性を考慮した全エクソームとプロテオーム解析による真の遺伝性高血圧症の検索
・基盤研究(C)/増殖因子の徐放化と生分解性鋳型を用いた同所性生体組織形成による一期的生食道再生
・基盤研究(C)/CD37 発現と網羅的リピドミクス解析による濾胞性リンパ腫増悪予測指標の開発
・基盤研究(C)/遺伝性骨髄不全症候群に対する高深度プロテオーム解析による診断技術開発
・基盤研究(C)/小児 IBD 患者におけるプロテオーム解析研究
・基盤研究(C)/質量分析計によるカルバペネム系抗菌薬の薬剤感受性試験の臨床応用
・挑戦的研究(萌芽)/作物・雑草の分子横断解析から迫るセーフナーによる除草剤選択性向上機構の解明

・挑戦的研究(開拓)/腸内細菌トランスオミクス解析を用いた小児疾患のトランスレーショナルリサーチ
・難治性疾患政策研究事業/自己炎症性疾患とその類縁疾患における、移行期医療を含めた診療体制整備、患者登録推進、全国疫学調査に基づく診療ガイドライン構築に関する研究

更に他省庁等の事業についても競争的資金の新規獲得に努め、前年度からの継続を含めて、計３１事業を実施した。
・共創の場形支援プログラム(COI-NEXT)【共創分野（育成型)】／災害など危機的状況から住民を守るレジリエントな広域連携医療拠点（ＪＳＴ）
・共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)【共創分野】／Big-DigtalTransformation（バイオDX）産学共創拠点にかかる公益財団法人かずさDNA研究所による研究開発（ＪＳＴ）
・革新的ＧＸ技術創出事業(Gtex)／代謝フラックス制御法開発のための代謝解析（ＪＳＴ）
・創造的研究支援事業(脂質代謝による病原性 T 細胞系譜の追跡と革新的治療法の創出)／脂質代謝による病原性 T 細胞系譜の追跡と革新的治療法の創出（ＪＳＴ）
・研究成果展開事業共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点（ＪＳＴ）
・医療研究開発事業補助金（生命科学・創薬研究支援基盤事業(BINDS)／疾患モデルマウスの作製とゲノムエンジニアリング技術の開発（ＡＭＥＤ）
・革新的先端研究開発支援事業(AMED-CREST)／時空間マルチサンプリング検体の単一細胞解析によるヒト免疫療法の基盤となる免疫記憶の解明（ＡＭＥＤ－慶應義塾大学)
・AMED-CREST(革新的先端研究開発支援事業)・「根本的な老化メカニズムの理解と破綻に伴う疾患機序解明」研究開発領域／ミトコンドリア恒常性と細胞・臓器・個体老化の連関解明（ＡＭＥＤ－熊本大学)
・難治性疾患実用化研究事業／原発性免疫不全症の診断率向上に向けた CD45 陽性細胞を用いたマルチオミックス解析の開発（ＡＭＥＤ－広島大学)
・難治性疾患実用化研究事業／新生児マススクリーニング対策疾患等の遺伝学的診断ネットワークと持続可能なレジストリを活用したリアルワールドエビデンス創出研究「新生児マススクリーニング対策疾患等の遺伝子診断のための効率の良い遺伝子パネルとその診断システムの改良とその運用」（ＡＭＥＤ－大阪公立大学)
・難治性疾患実用化研究事業／21 水酸化酵素欠損症の新たな小児期先制医療を目指した患者レジストリ構築、治療マーカーおよび簡便な遺伝学的検査法の確立（ＡＭＥＤ－東京科学大学)

・難治性疾患実用化研究事業／サイトカイン中和抗体に起因する先天性免疫異常症類似症の疾患概念確立に向けたエビデンス創出（ＡＭＥＤ－広島大学）
・難治性疾患実用化研究事業／卵黄食物蛋白誘発胃腸炎（FPIES）重症化予防のための管理方法の確立（ＡＭＥＤ－東海大学）
・難治性疾患実用化研究事業／毒性発現種差の大きい新規モダリティの安全性確保に資するプロテオミクス応用型オフターゲット評価法の開発と社会実装（ＡＭＥＤ－国立医薬品食品衛生研究所）
・成育疾患克服等総合研究事業／周産期・小児期の疾患等の予測・診断・管理に関する医療技術開発（ＡＭＥＤ－京都大学）
・成育医療研究開発費／先天性血小板減少症・異常症の QOL を改善するための新規診断法開発とレジストリに基づく病態解明（国立成育医療研究センター）
・地域を支えるサトウキビ大規模栽培体系構築事業／無人航空機を利用した雑草及び害虫被害を検出する基礎技術開発に係る研究委託業務（沖縄県農業研究センター）
・イノベーション創出強化研究推進事業／日本ブランドを支える種子イチゴの安定生産技術確立～イチゴ生産者の経営と働き方改革の実現（農林水産省）
・農水委託事業・食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト／スマート技術向けの特性を持つ果樹品種の開発（農林水産省）
・研究開発と Society5.0 との橋渡しプログラムのうち農林水産省が実施する施策(BRIDGE) 同時改変ゲノム編集技術を用いた産業植物の創出（農林水産省）
・農林水産研究推進事業委託プロジェクト研究／炭素貯留能力に優れた造林樹種プロジェクト（農林水産省）
・みどりの食料システム戦略実現技術開発・実証事業のうち農林水産研究の推進／みどりの品種開発加速化プロジェクト（農林水産省）
・農水省「革新的新品種開発加速化緊急対策のうち政策ニーズに対応した革新的新品種開発（提案公募型」／「ゲノム情報解析と高精度育種技術の融合による気候変動に強いビール大麦品種の開発」～収量 20%増と環境負荷軽減の両立～（農林水産省）
・2022 年度武田科学振興財団 ハイリスク新興感染症研究助成／「免疫－脂質代謝－ウイルス」を基軸とした生体にとって一石二鳥となる抗ウイルス免疫応答の新規制御法開発（武田科学振興財団）
・2022 年度武田科学振興財団ライフサイエンス研究継続助成／制御性 T 細胞分化をプログラムする脂質代謝地図の解読（武田科学振興財団）
・2023 年度ステップアップ研究助成／肥満における免疫病原性バイアスの分子機構解明（アステラス病態代謝研究会）
・2023 年度上原記念生命科学財団研究助成／リンパ球系譜において RORγt 多機能性を司る脂質代謝経路の解明(上原記念生命科学財団)
・2023 年度研究助成（新たな海洋の生物種や生態、その機能の発見）／Holistic

Genomic Approach to Asia-Pasific Marine Diversity（笹川平和財団海洋政策研究所）

・2023 年度小野薬品がん・免疫・神経研究財団研究助成／精密脂質免疫学から実現する Th17 疾患の克服（公益財団法人小野薬品がん・免疫・神経研究財団）

・2024 年度化血研ステップアップ研究助成／脂質代謝を基軸とした次世代ウイルスシステムの PoC 確立（一般財団法人化学吸血清療法研究所）

・2024 年度上原記念生命科学財団研究助成／免疫－脂質代謝－ウイルスを基軸とした生体にとって一石二鳥となる抗ウイルス免疫応答の新規制御法開発（公益財団法人上原記念生命科学財団）

ウ　賛助会費の確保

企業・団体等に対し、法人設立趣旨や公共性の高い研究活動への理解を求めるとともに、新規加入の促進に努めた。

（２） 持続可能な運営体制の構築

ア　計画的な職員採用と適正配置

安定かつ持続的な運営を確保するため、正規職員（研究職・技術職・事務職）の計画的な採用に努め、重点事業や公益事業の拡大等による業務量の変動も踏まえながら、経験や実績を重視した人員配置を行った。

イ　人事評価制度及び給与制度の適正な運用

人事評価制度と給与制度を適正に運用し、研究実績及び勤務実績などを給与に反映させ、職員のモチベーションの向上を図るとともに、他の研究機関の状況や経済・雇用環境の動向を踏まえ、適切な給与水準となるよう適宜見直しを行った。

ウ　職員の人材育成と事務処理能力の向上

正規職員を中心とする自立型経営を推進するため、ＯＪＴ（On the Job Training）に積極的に取り組んだ。多様化、複雑化する事務に対応するため、事務職員の法令等に関する知識事務処理スキルの向上を図り、既存のスキルアップ制度を強化するとともに、担当業務に関連する各種講習の受講や資格取得を促し、組織体制の充実を図った。

エ　かずさＤＮＡ研究所研究評価委員会の活用

社会の要請、時代の変化等に対応した高度かつ効率的・効果的な研究を推進するため、外部の有識者から構成された研究評価委員会で得た助言を踏まえ、適切な組織運営に取り組んだ。

オ　適正な予算管理と経費の節減

年度当初に各部に配賦した予算の執行状況を適時確認するとともに、職員への関係規程等の順守を徹底し、内部統制機能の強化に努めた。

カ　契約事務の適正な執行

限られた予算を効率的に活用するため、競争入札の原則を遵守し、一層の経費節減に努めた。

キ　効率的な機器等の調達及び管理

共有できる機器等について他部署と重複して購入することのないよう機器の購入計画を作成して情報の共有を図った。

ク　計画的な施設設備の改修・更新

研究所開所以来約３０年が経過し、施設設備の老朽化が著しく進んでいることから、県の県有建物長寿命化計画においても第Ⅲ期（令和 10 年～14 年）の整備計画の対象とされている。令和８年度から大規模改修に係る基本計画の策定作業が開始されることを踏まえ、県と協議を進めるとともに、事業機能維持と安全性確保を前提として優先順位を精査し、計画的かつ効率的な改修・更新が進められるよう努めた。

また、非常用電源の更新等による停電時の電源維持体制の強化について検討を進め、対応を図ることとした。

さらに、県と連携して、空室となっている共同研究フロアの入居者の確保に努め、施設の有効活用を推進した。

ケ　事務の効率化とデジタル化の推進

事業の拡大による事務の増加と多様化に対応するため、人事財務システムを活用して事務効率の向上に努めた。

また、専門家の意見を聞きながら全ての作業プロセスを精査した上で簡素化を図り、電子契約サービスの積極的な活用やデジタルファイルによる運用・保管に努めた。これにより、ペーパレス化の実現に向けたデジタル化を推進した。

５　庶務的事項

（１）役員等の状況

令和８年３月３１日現在の役員等の状況は理事１０名、監事３名、評議員１５名となっている。

（２）職員の状況

令和８年３月３１日現在のかずさＤＮＡ研究所の組織は別表のとおりであり、職員の状況は、研究員４１名、技術員７３名、事務職員３３名、補助職員等５名、合計で１５２名となっている。

（３）理事会・評議員会の運営状況

・令和７年４月１日（火）（書面評決）　理事会
　議案１　専務理事の選定について
　　２　専務理事の役員報酬額の決定について

・令和７年５月９日（金）（書面評決）　理事会
議案１　新理事２名の選任に係る評議員への提案について
　　２　新評議員１名の選任に係る評議員への提案について
・令和７年５月２３日（金）（書面評決）　評議員会
議案１　新理事２名の選任について
　　２　新評議員１名の選任について
・令和７年６月４日（水）第４１回理事会
場所　ステーションコンファレンス東京
開催方式　会場と理事勤務先等との間でオンライン開催
第１号議案　令和６年度事業報告及び収支決算について
第２号議案　株式会社かずさゲノムテクノロジーズとの取引について
第３号議案　評議員会の招集について
・令和７年６月２３日（月）第２６回評議員会
場所　ステーションコンファレンス東京
開催方式　会場と評議員勤務先等との間でオンライン開催
第１号議案　令和６年度事業報告及び収支決算について
第２号議案　理事の選任について
第３号議案　特別顧問の承認について
・令和７年６月２３日（月）第４２回理事会
場所　ステーションコンファレンス東京
開催方式　会場と理事勤務先等との間でオンライン開催
第１号議案　常務理事の互選について
第２号議案　役員報酬額の決定について
・令和７年７月３１日（木）（書面表決）　理事会
議案１　評議員会の書面開催について
　　なお、評議員会の議案は監事１名の選任とする
・令和７年８月２５日（月）（書面表決）　評議員会
議案１　新監事１名の選任について
・令和８年２月１０日（火）（書面表決）　理事会
議案１　評議員会の招集について
・令和８年３月１３日（金）第４３回理事会
場所　ステーションコンファレンス東京
開催方式　会場と理事の個人宅等との間でオンライン開催
第１号議案　理事長の互選等について
第２号議案　役員報酬額の決定について
第３号議案　令和７年度収支補正予算について
第４号議案　令和８年度事業計画及び収支予算等について
第５号議案　中期経営計画（第６期）の中間評価及び改訂について
第６号議案　役員賠償責任保険契約締結について
第７号議案　特定費用準備資金等取扱規程の改正について
・令和８年３月１３日（金）第２７回評議員会
場所　ステーションコンファレンス東京

開催方式　会場と評議員勤務先等との間でオンライン開催
第１号議案　研究所長の承認について
第２号議案　令和７年度収支補正予算について
第３号議案　令和８年度事業計画及び収支予算等について
第４号議案　中期経営計画（第６期）の中間評価及び改訂について
第５号議案　特別顧問の承認について

（４）監査の状況

令和８年５月２９日(金)当財団の監事による令和７年度事業報告及び収支決算について監査が行われた。

（５）運営委員会の開催

研究所の研究活動を円滑に推進することを目的として、毎月所内運営委員会を開催し、採用職員の選考や各種規程の制定など研究所運営に関する必要な事項を審議した。

公益財団法人かずさＤＮＡ研究所役員名簿

（令和８年６月１日現在）

役員名	氏　名	所　属　役　職　等
理事長	田畑　哲之	
副理事長	佐藤　和広	公益財団法人かずさＤＮＡ研究所　所長
専務理事	井上　宣之	公益財団法人かずさＤＮＡ研究所　事務局長
常務理事	小原　收	公益財団法人かずさＤＮＡ研究所　副所長
理事	篠崎　一雄	国立研究開発法人理化学研究所　栄誉研究員・名誉研究員
理事	宮島　篤	国立大学法人東京大学定量生命科学研究所　特任教授
理事	高木　利久	富山国際大学　学長
理事	冨沢　昇	公益財団法人千葉県産業振興センター　理事長
理事	関　雄二	千葉県商工労働部長
	計　９　名	
監事	尾關　邦斗	株式会社千葉興業銀行　常務執行役員
監事	白石　欣央	株式会社京葉銀行　地域共創部長
監事	齋藤　久晃	公認会計士・税理士
	計　３　名	

公益財団法人かずさＤＮＡ研究所評議員名簿

（令和８年６月１日現在）

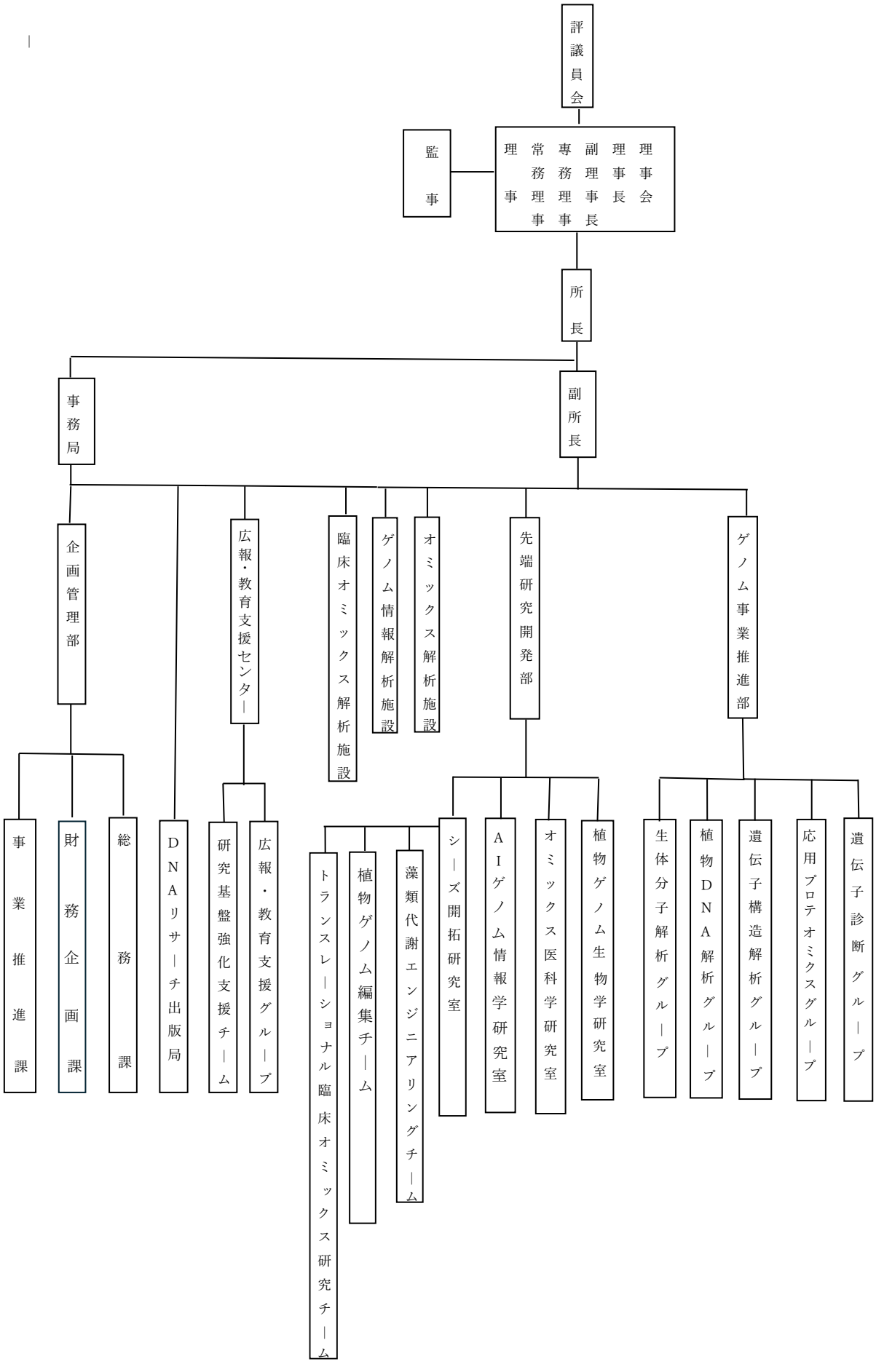
役員名	氏　名	所　属　役　職　等
評　議　員	田中　幸子	木更津市副市長
評　議　員	荒井淳一	君津市副市長
評　議　員	阿久津和司	千葉県産業支援技術研究所　所長
評　議　員	板倉　孝一	千葉県農林総合研究センター　センター長
評　議　員	加藤　厚	千葉県病院局がんセンター　病院長
評　議　員	花岡　文雄	国立大学法人大阪大学　名誉教授
評　議　員	齊藤　和季	国立研究開発法人理化学研究所　領域総括
評　議　員	岡田　清孝	国立大学法人京都大学・基礎生物学研究所・総合研究大学院大学　名誉教授
評　議　員	中谷　晴昭	国立大学法人千葉大学　名誉教授
評　議　員	古関　明彦	国立研究開発法人理化学研究所生命医科学研究センター　副センター長
評　議　員	竹山　春子	早稲田大学理工学術院先進理工学部生命医科学科教授
評　議　員	堤　正好	一般社団法人　日本衛生検査所協会　顧問
評　議　員	小髙　信和	株式会社千葉銀行　常務執行役員
評　議　員	石津　廣司	全国市長会顧問弁護士
評　議　員	黒野嘉之	千葉県副知事
	計　１　５　名	

公益財団法人かずさＤＮＡ研究所特別顧問名簿

（令和８年６月１日現在）

役員名	氏　名	所　　属　　役　　職　　等
特別顧問	熊谷　俊人	千葉県知事
特別顧問	大 石 道 夫	東京大学名誉教授
	計　２　名	

公益財団法人かずさＤＮＡ研究所組織図　（令和８年３月３１日現在）



附　属　明　細　書

令和７年度事業報告書には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第３４条第３項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。

令和８年６月
公益財団法人かずさＤＮＡ研究所